



高橋余一の「生活絵巻」

02 養蚕



(時計回りに) 桑摘みはさみ(指にはめて摘む)、腰づけ簞、てんびつ簞、さん台、繭簞、七分ザル、五分ザル、七分延、五分延の二種類あった、下げランプ、目棚

美濃加茂は、明治期から養蚕が盛んな地域でした。農家は繭を売り、現金収入を得ることができました。大正七年、古井村に郡是製糸美濃工場ができると、養蚕はますます活気づきました。

昭和30年代ごろまでは「座敷飼い」と呼ばれる普段は生活をする部屋の畳を上げて板の間にし、竹と木で作った目棚を作り付けて飼育しました。その間、人は縁側や西日の入る納戸で寝食をしました。

蚕具は、簡単な仕組みのものであれば、手作りで「こさえる(作る)」ことも多くありました。1日4、5回桑やりをするほど、繭になる直前の蚕はたくさん桑を食べました。農家の家の周りには、一面の桑畑が広がっていました。

■ 繭の集荷(昭和期)

